歴史地震
第17号(2001) 227-228 頁
受付日 2002/3/1

庄内地震を描く絵巻「酒田大震災実況図」

東洋大学非常勤講師* 北原 糸子

Itoko Kitahara

4-4-1-5-201, Nara, Aoba-ku, Yokohama-shi

227-0038 Japan

酒田市巡検地の光丘文庫において閲覧させていただいた本図は、酒田市有形文化財に指定されているものである(昭和38年指定縦25.5 cm＊横915 cm)。震災時(明治27年)酒田市に滞在していた画家が翌明治28年3月に眼に残る惨状を描いたと末尾に記されている。作者大飛と称する画家については、以下のことが知られている。

生駒大飛(1857-1922)、本荘藩士。父武雄は知行高 200 石の重臣、家老職を歴任。大飛は画工として技量を磨き、詩文を京都において、南画を大阪において学んだ人物(本荘市史第2巻812頁)。

構成は、巻子状の一図のはじめに墨書で「明治二十七年十月二十二日酒田大地震惨状」と記され、朱書の説明が付いた十一の被災実況図からなる。家屋・樹木などは墨の濃淡、焔は朱の濃淡、炎のなかを逃げ惑う人々や震災後の仮小屋周辺の人々の動きを示す箇所のみに若干の水色を入れるなどの色遣いがなされている(箱書「震災大実況図」, 端裏書「震災実況図」2図)。

＊伝馬町実景 二十二日夜写所見(1図)
ここでは酒田町の繁華な街の家屋が焔に包まれ、人々が逃げまどう姿が描かれている。

＊観音路実景 同夜所見
港町の繁栄を物語る当時の馬亭、鰻亭、和田八などの料亭の大楼が炎の中に崩れ落ちていく様が描かれている。

＊観音路鰻亭惨状 二十三日午前写之
鰻亭の焼け落ちた後に門前に焼けこげた死体が描かれている。

＊以下於船場町 写生(3図)
子供、あるいは妊婦が苦しみながら死んでいったであろう姿を描く焼死体の図、埋葬の用意が整った早桶、菰、筵に置かれた死者など。

＊今町弁天社内仮小屋(4図)
引戸で周りを囲った仮小屋の廻りで煮炊きをしたり、米を運び込んだり、大八車を引くなど、震災後生活を取り戻すためにいち早く立ち働く人々の姿が映される。

＊海光(向 脱ヵ)寺

＊山王神社

＊晏(安)祥寺 四日後大潰

＊祥(浄)福寺

＊名称不記(倒壊家屋の図)

「明治甲午十一月(ママ)二十二日酒田大震家屋大潰危急九死得一生、其惨状有眼、因以製其図、以送堀雅兄、于時乙未春三月 大飛(印)」

(生駒大飛については光丘文庫土岐田正勝氏のご教示による)

この災害図についての若干の感想:

この絵を光丘文庫長さんから見せられた時の衝撃を今でも忘れることはできない。炎に包まれる家屋の描写はこれまでも江戸時代の震災図などに例が多いからそれほど珍しくはなかったが、黒焦げの焼死体、それも苦しみだけがそのまま残されているかのように、虚空を掴む手や指、姿態をねじ曲げた子供の姿は、絵を見る度に胸を打たれるのである。こうした惨状は実際にはこれまでの震災で少なからずあったはずだが、江戸時代の災害絵図で見たことはなかった。明らかに近代に入って災害を見る眼差しが変わってきているのである。このリアルな描写はなにによってもたらされたのだろうか。恐らく、近代に入ってから急速に増えた災害写真による影響が大きいと思われる。災害写真が活躍し始めるのは、明治 18 年の大阪淀川の洪水あたりからであろうが、磐梯山噴火、濃尾地震と災害写真は飛躍的に市場に流れたはずである。磐梯山噴火では、爆風で倒れた家屋だけでなく、人馬、泥流に流された死体などの写真も残され、これらが幻灯写真として広く活用されている。庄内地震の写真を確認していないが、酒田市今町池野伝左衛門の発

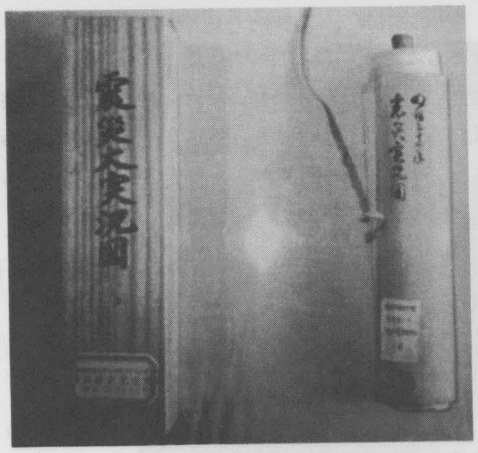
* 〒227-0038 横浜市青葉区奈良4丁目4-1-5-201

行になる色刷石版画が残されている。こうした石版画は多くの場合、写真をマスプリする印刷技術が当時は開発されていなかったので、写真の状景を石版画にしたケースが多いからである。しかし、当時の災害発生時に、写真で決定的瞬間を映し出すことは不可能であった。

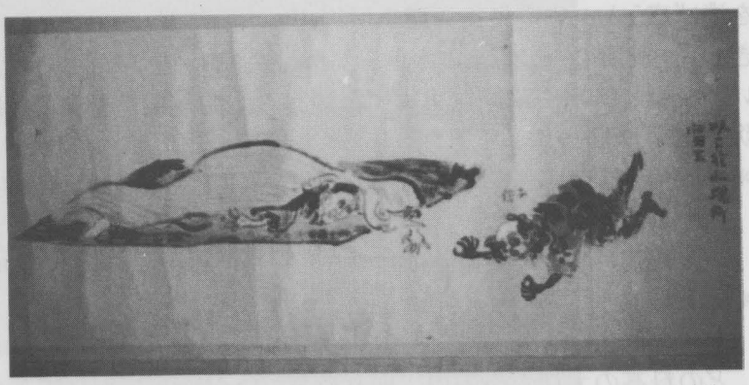
また、江戸時代からの系譜を引く錦絵も明治 20 年代の頻発する災害で、かつてほどではないにしても多く売り出された。磐梯山噴火（1888）、濃尾地震（1891）然りである。戦争も視野に入れれば、当然ながら日清戦争の錦絵は爆発的な売れ行きであった。ここで戦争画を除くとしても、それらの錦絵は作者はほとんどの場合、現場を知らず、東京にいて写真などを見ながら、話題の要素を合成したカラーフルな想像画を描いていたのである。これらの錦絵は進んだ技術である写真では処理できない、人々が災害場面で起きたと想像する状景を合成して、巷間の情報欲求を満たしていた。

しかし、生駒大飛の描く震災図はこれらのいずれにもない力がある。それはなにかは、この絵を見て感ずるものそのものだという他はないだろう。わたしは画家の技量を評する立場にはいないが、写真のリアリズムでもなく、錦絵の想像画でもなく、まさに大飛の眼に焼き付いて離れなかった状景の生々しい衝撃が昇華され、そのエッセンスのみが作品化されたものとして価値が高いと考える。

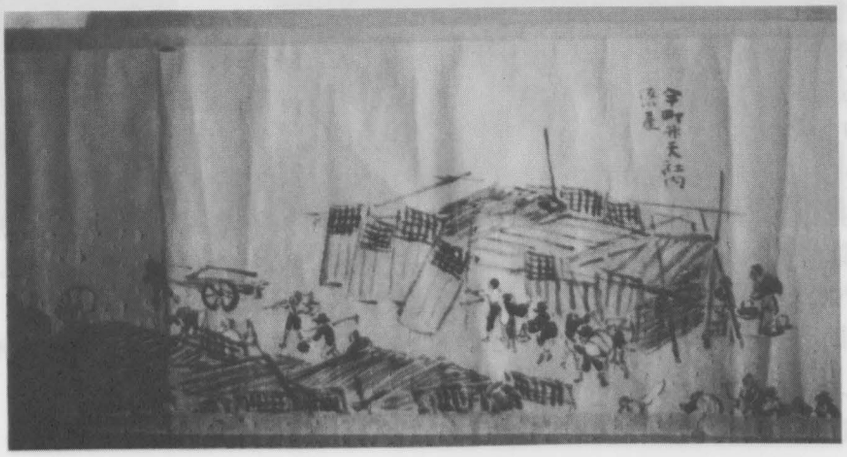
1 図



2 図



3 図



4 図